特別史跡熊本城跡総括報告書

整備事業編

２０１６

熊　本　市

特別史跡熊本城跡全域航空写真
（2012 年撮影分を合成加工）

竹の丸石垣群
（2016 年 3 月 17 日撮影）

熊本城を熊本市庁舎より臨む

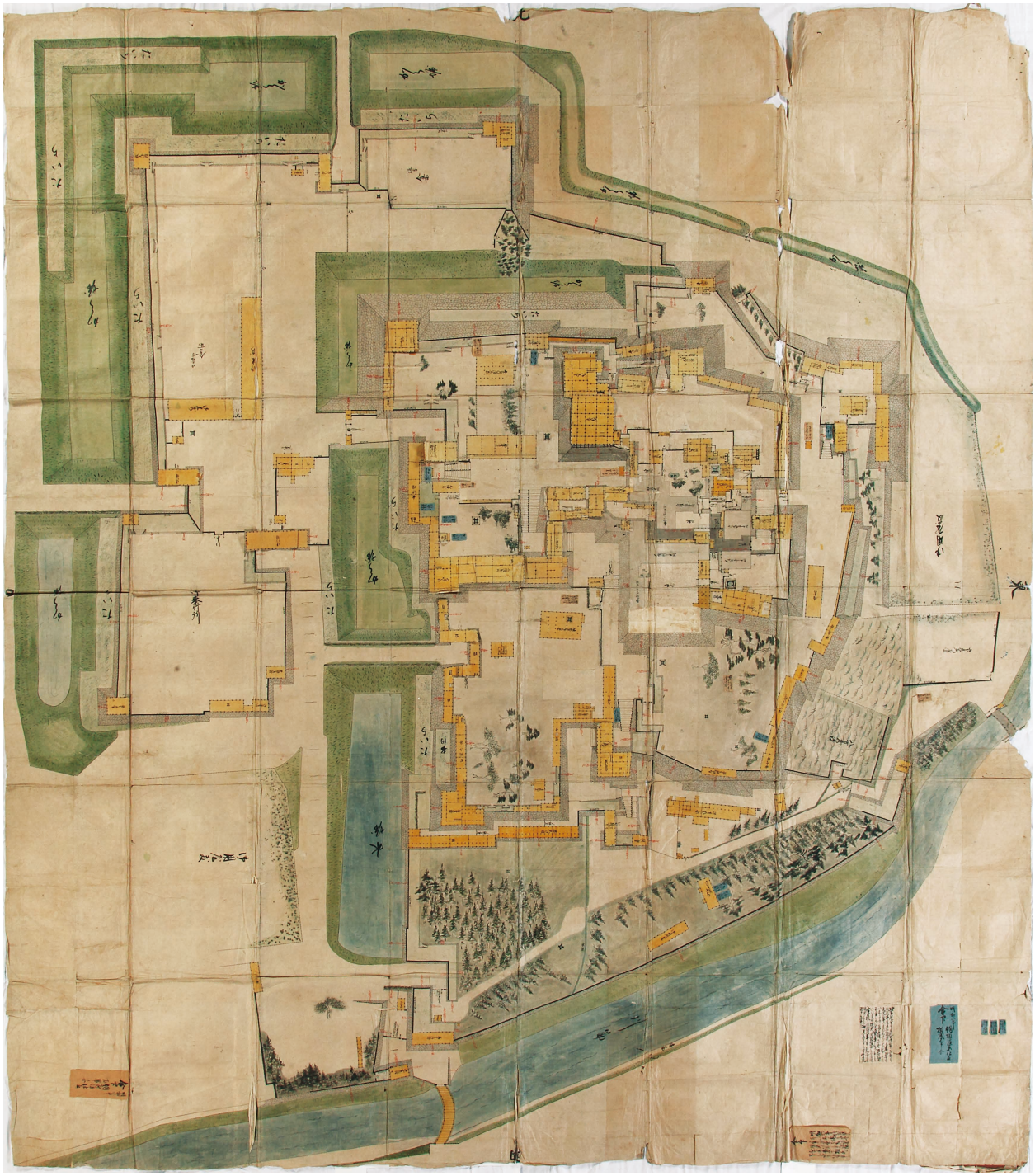
奥に大天守、その手前に本丸御殿大広間
さらに手前に重要文化財の櫓群があり、
一番手前が重要文化財長塀と平御櫓
左手奥には数寄屋丸二階御広間も見える。

（2011年5月20日撮影）

備前堀から飯田丸五階櫓を見る

（2015 年 1 月 28 日撮影）

重要文化財宇土櫓
（2016 年 1 月 19 日撮影）



「御城内御絵図」

明和６年（1769）、熊本市所蔵

発刊にあたって

加藤清正公が 400 年以上前に築いた熊本城は、加藤家２代・細川家 11 代にわたり受け継がれ、その後、明治から昭和初期にかけての軍用地時代を経て、戦後の昭和 21 年には、本丸地区を中心に千葉城緑地として都市計画決定がなされました。

そして、昭和 24 年に本丸・二の丸地区大半の土地所有者である大蔵省から貸与された熊本市は、昭和 35 年に天守閣を再建、さらに、昭和 40 年には文化財保護法に基づく史跡管理団体として指定され、以後、貴重な歴史的文化遺産である石垣をはじめとした史跡や重要文化財建造物などの適正保存に努めるとともに、平成９年度に策定した『熊本城復元整備計画』のもと、南大手門や本丸御殿大広間などを復元整備し、江戸時代の歴史空間を実感いただくための取り組みも進めてきたところです。

その結果、熊本城は、平成 20 年の本丸御殿大広間がオープンした折には、年間 222 万人、それ以降も年間 160 万人前後の多くの方々をお迎えしており、高い評価をいただいております。

このような中、本市では、熊本城跡の本質的価値の解明に向けた継続的な研究体制強化のため、平成 25 年 10 月に熊本城調査研究センターを設置し、城及び城下の総合的な調査研究に本格的に着手しました。そこで、まずは、近現代における熊本城の整備や整備に至る経緯、事業の進め方などについて整理・検証を行い、本史跡を次世代へ継承するための基礎資料とするとともに、今後の保存と活用の参考とすることを目的として、この度、整備事業に関する総括報告書を刊行しました。

本市では、総合計画においても歴史的文化遺産を適正に保存・整備・活用し、郷土の愛着を深めるという方針を掲げ、今後とも、県市民はじめ多くの方々に文化財に対する理解と愛着をもっていただき、熊本城の価値と魅力を次世代へ継承していくために取り組みを進め、歴史的文化遺産である特別史跡熊本城跡を広く国内外へ発信してまいる所存であります。

最後になりましたが、本市のこれまでの取り組みにご指導、ご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

平成 28 年３月

熊本市長　大 西 一 史

例　　言

1　熊本市は、特別史跡熊本城跡で長年実施されてきた様々な整備事業、発掘調査、収集資料を取りまとめ、総括し、特別史跡熊本城跡総括報告書を作成することとした。総括報告書は、整備事業をまとめた整備事業編、発掘調査の成果を中心とした調査研究編、古文書・絵図・古写真などを網羅した資料編の３編で構成される。

2　本書には、昭和 28 年度から行われた重要文化財の修理から平成 26 年度に完了した馬具櫓及び続塀の復元工事までの整備事業について掲載した。対象は、整備全般とした。

3　本書掲載の記事のうち、既に報告書が刊行されている事業については、その報告書から抜粋した。また、既刊報告書については、参考文献にまとめた。

4　元資料において旧字や旧仮名遣いが使用されているものについては、意味の変わらない範囲で現行の表記を用いた。なお、「復元」と「復原」の使い分けについては意味があるものと考え、元資料の表記のままとした。

5　写真のキャプションについては、元資料に記載がある場合は、そのまま記載した。所蔵先はキャプションに示したが、記載のないものはすべて熊本市の所蔵である。

6　本書の作成に関する担当は次のとおりである。

監修・本文執筆・挿図作成　熊本城調査研究センター
（渡辺勝彦・鶴嶋俊彦・古賀丈晴・金田一精・田代純一・木下泰葉）

編集・本文執筆・挿図作成　公益財団法人文化財建造物保存技術協会（春日井道彦・稲田朋実）

口絵写真撮影　文化振興課（航空写真）
熊本城調査研究センター（竹の丸石垣群）
公益財団法人文化財建造物保存技術協会（その他）

7　本書の作成にあたっては、文化庁文化財部記念物課の担当調査官、特別史跡熊本城跡保存活用委員会史跡部会及び建築部会の委員各位に指導及び助言を受けた。記して感謝の意を表する。

8　掲載写真については、文化庁（参事官建造物担当）の協力を得た。記して感謝の意を表する。

特別史跡熊本城跡総括報告書 整備事業編

目　　次

第１章　特別史跡熊本城跡の概要 …… 1
第１節　熊本城の歴史と地理 …… 1
第１項　地理的環境 …… 1
第２項　歴史的環境 …… 6
第３項　文献資料にみる熊本城 …… 9
第２節　熊本城跡の位置と範囲 …… 15
第１項　熊本城跡の位置 …… 15
第２項　旧城域について …… 16
第３節　熊本城跡の指定の経緯と理由 …… 20
第４節　熊本城跡の現況 …… 29
第１項　熊本城の構成要素 …… 29
第２項　熊本城周辺の植生状況 …… 31
第３項　熊本城周辺の社会環境 …… 31
第４項　熊本城周辺の土地の所有・所管 …… 34
第５節　熊本城跡の埋蔵文化財に関する調査 …… 35
第６節　熊本城に関する歴史資料 …… 37
第２章　整備事業の概要 …… 43
第１節　事業の概要 …… 43
第１項　地形改変に関する経緯 …… 43
第２項　戦後の熊本城整備 …… 45
第３項　石垣整備状況 …… 62
第４項　史跡の整備状況 …… 65
第５項　重要文化財建造物修理状況 …… 66
第６項　都市計画・公園整備など …… 68
第７項　組織体制 …… 71
第２節　特別史跡熊本城跡保存管理計画 …… 72
第３節　熊本城復元整備計画 …… 79
第３章　石垣の保存修理・復元 …… 93
第１節　城郭全体の保存と整備 …… 93
第２節　保存修理事業 …… 95
第４章　建造物の復元整備 …… 129
第１節　鉄骨鉄筋コンクリート造による天守の外観復元 …… 129
第２節　コンクリートブロック造での外観復元 …… 130
第１項　平御櫓 …… 130
第２項　馬具櫓 …… 132
第３項　平左衛門丸塀 …… 132
第３節　第Ⅰ期復元整備事業以前の木造による復元 …… 133
第１項　西大手門の復元 …… 133
第２項　数寄屋丸二階御広間の復元 …… 134

第４節　第Ⅰ期復元整備事業による木造復元 …… 165
第１項　南大手門・戌亥櫓・未申櫓・元太鼓櫓・奉行丸及び西出丸塀の復元 …… 165
第２項　飯田丸五階櫓 …… 172
第３項　本丸御殿（大広間・大台所・数寄屋）…… 179
第５節　第Ⅱ期復元整備事業による木造復元 …… 199
第１項　馬具櫓及び続塀の木造復元 …… 199
第２項　平左衛門丸塀の木造による復元 …… 214
第５章　その他の整備 …… 217
第１節　本質的価値を構成する要素に関する整備 …… 217
第２節　その他の整備 …… 221
第１項　園路・広場等 …… 221
第２項　管理・便益施設 …… 225
第３項　インフラ設備 …… 232
第３節　地区ごとの整備 …… 242
第１項　本丸地区 …… 242
第２項　二の丸地区・三の丸地区 …… 244
第３項　古城地区 …… 246
第４項　千葉城地区 …… 247
第４節　樹木 …… 248
第６章　文化財建造物の保存修理 …… 251
第１節　重要文化財建造物の指定 …… 251
第２節　重要文化財建造物の修理 …… 254
第１項　宇土櫓 …… 254
第２項　源之進櫓 …… 287
第３項　四間櫓 …… 288
第４項　十四間櫓 …… 290
第５項　七間櫓 …… 292
第６項　田子櫓 …… 294
第７項　東十八間櫓 …… 296
第８項　北十八間櫓 …… 297
第９項　五間櫓 …… 300
第 10 項　不開門 …… 302
第 11 項　平櫓 …… 303
第 12 項　監物櫓（新堀櫓）…… 306
第 13 項　長塀 …… 323
第３節　その他の歴史的建造物 …… 324
第１項　西櫓御門の修理 …… 324
第２項　櫨方門 …… 331
第３項　細川刑部邸（熊本県指定重要文化財）…… 333
第７章　総　括 …… 336
第１節　課　題 …… 336
第１項　石垣修理に関する課題 …… 336
第２項　建造物復元整備に関する課題 …… 336
第２節　総　括 …… 342

第１章　特別史跡熊本城跡の概要

第１節　熊本城の歴史と地理

第１項　地理的環境

Ⅰ　概要

熊本市は、熊本県の県庁所在地として発展し、平成 20 年に富合町、平成 22 年に植木町・城南町と合併した結果、人口が 73 万人に達し政令指定都市となった。この合併により市域は格段に拡大し、面積は、熊本県の 5.3％にあたる約 390㎢を占めている。以下に、熊本城跡周辺を中心に熊本市域の地勢について概観する。

市域は大きく分けて、有明海と内陸部を隔てている中央西側の金峰山塊、市域南西側にあって有明海に望み、台地と山地で縁どられた広大な熊本平野、北部･東部･南部にかけての台地（火砕流台地･河岸段丘)、で構成される。市域には、東西に貫流する白川、南東から東西に貫流する緑川の水系があり、熊本平野に望む台地は両水系によって開析され、活発な沖積作用により熊本平野は形成された。

東部の台地は、先端の熊本平野から東方へ向かって高度を増し、阿蘇外輪山西側斜面へと続く。北側の台地も熊本平野から北へ向かってやや高度を増しながら続き、国道 208 号線・県道 30 号線付近を境に高度を下げて、山鹿盆地・玉名平野に望む。先の道路付近が分水境界となり、境界から北側は木葉川や合志川などの菊池川水系の河川に開析されている。

熊本城跡遺跡群は、通称京町台地先端の茶臼山に立地する。この台地は、阿蘇火山起源の火砕流堆積物が基盤をなす。阿蘇火山からの大規模な火砕流は、数万年の間隔をおいて４回起こり、最大規模であった約９万年前といわれる最後の火砕流（Aso －４、以下 Aso －４）が熊本平野周辺を覆っている。京町台地より東側の台地は、さらに Aso －４以後の砂礫層に覆われているが、この砂礫層は京町台地までは到達していない。このため、京町台地を含めて金峰山塊までの間は Aso －４の端部の様相を呈し、火砕流が金峰山塊にのし上げた格好になるため、噴出源である阿蘇火山に対して逆傾斜になる。火砕流は花岡山にも到達し、その先は沖積平野の下に潜っている。この火砕流による堆積物は、深い部分では溶結し硬質の溶結凝灰岩となり、浅い部分は溶結が進まず軟質の非溶結凝灰岩となる。

Aso －４の後は、地形に影響するような大きな火山活動は無く、熊本市域の洪積台地は主に阿蘇火山や雲仙火山起源の火山灰に覆われる。火砕流堆積物と火山灰によって形成された京町台地は、白川水系の坪井川・井芹川とその支流により開析され、河川の主な流下方向である南北方向に長く伸びる。河川の浸食は、非溶結凝灰岩だけでなく溶結凝灰岩も樹枝状に解析し、京町台地は急崖に縁どられる特徴的な地形を呈している。台地の表面の起伏は弱く、基盤である火砕流堆積物と同様に北東から南西へ緩やかに下がりながら熊本平野へ至る。

Ⅱ　金峰山塊の岩質

熊本城跡の石垣の大半は輝石安山岩である。これは金峰山塊で産出される安山岩の一つで、立地も含めて考慮すれば金峰山塊が主産地であることは容易に想定される。実際に、矢穴の痕が残る転石も確認されている。以下に石垣石材の生成に絡む金峰山塊について記す。

金峰山塊は、一つの大きな成層火山ではなく、多くの火山の集合体である。火山の活動は２期に大別され、古期噴出物としては、80 ～ 120 万年前の活動による松尾山火山岩類・古期金火山岩類・石神山火山岩類があり、新期噴出物としては、三ノ岳火山岩類・二ノ岳火山岩類・カルデラ形成後に成長した一ノ岳（中央火口丘）火山岩類がある。古期噴出物の岩質は、玄武岩･輝石安山岩･角閃石安山岩など多様であり、

図 1-1　熊本城の位置（1/15000）

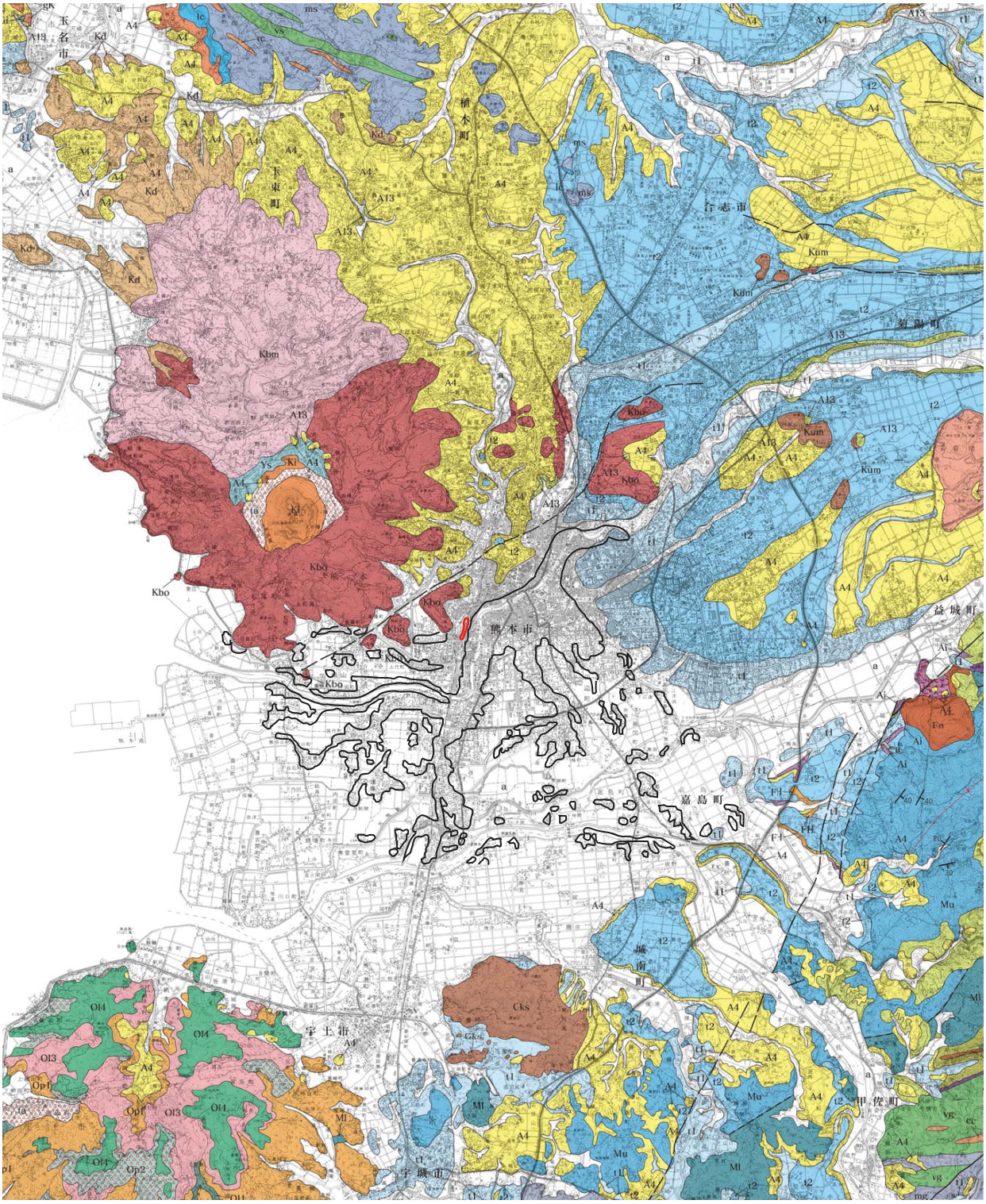


Fig.　熊本城周辺の地質図　熊本県地質図（10万分の1）説明書（2008）より加筆引用

凡例

A4：阿蘇−４火砕流堆積物　Kbo：金峰火山古期噴出物　A13：阿蘇-1～3火砕流堆積物　t1：低位段丘堆積物　t2：中位段丘堆積物
Ki：金峰火山新期堆積物　Ys：芳野層　ta：崖錐堆積物　Kbm：金峰火山中期噴出物　Kum：熊本層群　Ai：赤井火山（砥川溶岩）
Mu：御船層群上部層　FH：布田層・花房層　MI：御船層群下部層　vg：苦鉄質火山岩類　cc：結晶質チャート　um：超苦鉄質岩類
Gks：雁回山層　Ol1：大岳古期輝石安山岩溶岩　Ol3：大岳新期角閃石安山岩溶岩　Ol4：大岳新期輝石安山岩溶岩
Op1：大岳新期角閃石安山岩火砕岩　Op2：大岳新期輝石安山岩火砕岩

○の範囲は調査地、○の範囲は自然堤防の範囲を示す。

図 1-2　熊本城周辺の地質図
熊本県教育委員会『熊本県文化財調査報告第 30 集熊本城跡遺跡群』2014 より改変・転載。

うち、角閃石を少量含む輝石安山岩が主体をなす。これは、粘性の強い溶岩噴出によって生成されたもので、肌理が細かく、また割るのにも適していることから、加工石材として現在も広く利用されている。

現在の安山岩類の採掘場は、古期噴出物から形成される地域、すなわち外輪部の南東－南－西側で数箇所が知られる。

立田山断層は、熊本城の北側付近を走ると想定されている。城内と京町を分ける新堀も、立田山断層に起因する丘陵の狭隘部を利用したとされ、京町台地と茶臼山丘陵を分ける高低差もこの断層によるずれとも考えられている。

熊本城石垣の石取場の推定については、富田紘一氏の研究がある。これによれば、石垣採石により地形が大きく変化している可能性が高いことから、大量の熊本城石垣の供給を賄い得た場所として、坪井川河口付近の要江・近津を主要採掘地の有力候補としている（富田2007）。この他、岩石学的成果の援用、『肥後国誌』等の伝承、矢穴の痕跡を認める転石などの存在から、石神山・花岡山・独鈷山・百貫石付近などを採石地として紹介している。

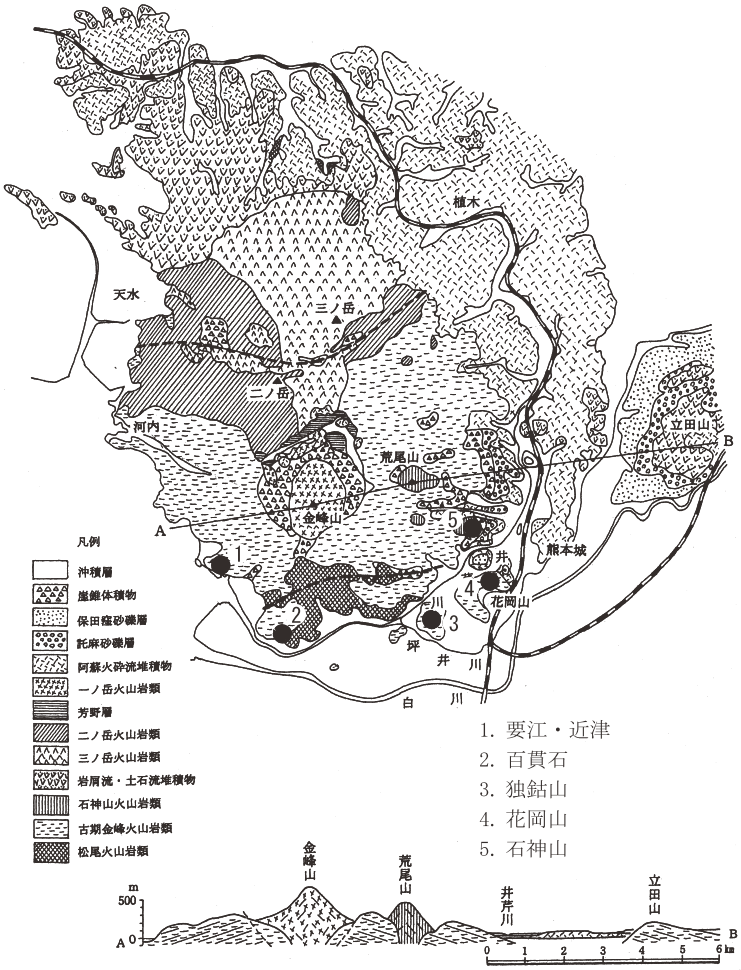


図 1-3　金峰火山の地質と採石推定地
渡邉一徳（熊本市 1998）より加筆・転載。

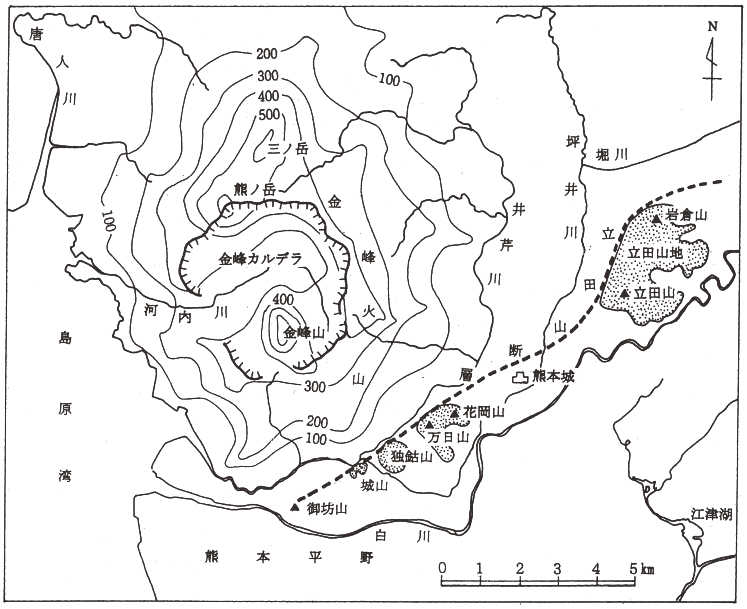


図 1-4　熊本市域の山地分布
渡邉一徳（熊本市 1998）より加筆・転載。

Ⅲ　熊本城跡の地形

京町台地の先端は、現在の新堀橋付近で東西幅が狭くなり、古来から茶臼山とも呼ばれていたように独立丘陵状を呈する。平面形は、解析による大小の弧の連続で構成されており、全体としては現在の熊本県立第一高等学校（以下、第一高校、という）を要とし、東の千葉城、西の段山を両端とした扇形の地形を呈する。京町台地の特徴的な崖地形が随所にみられ、第一高校グランド、藤崎台球場南側、清爽園などの崖面に Aso － 4 火砕流堆積土の非溶結凝灰岩露頭がみられる。

崖面の形成は、河川により削られたものだが、富田紘一の研究成果（富田 1996）によれば、熊本城築城時、白川も京町台地に接して流れていたとされる（図 1-5）。富田は、慶長国絵図などをもとに、現在熊本城跡の南を流れる白川が、世継橋から北側へ大きく蛇行し、市役所付近で坪井川と合流していて、これを 17 世紀初頭に加藤清正が白川を直線化し、現在の流路に付け替えたとする。富田の旧白川跡想定地には、現在でも窪地がみられる。この河川の流路変化と合わせて城内の南崖面を概観すると、第一高校のグランドに面した崖面、国立病院機構熊本医療センター（以下、国立病院、という）と熊本西税務署の間の段差、桜の馬場と奉行丸の間の段差、東竹の丸の高石垣と連続した高低差の大きい弧状の地形は、白川・坪井川の浸食面であった可能性を想定できる。実際、桜馬場の発掘調査や第一高校校長官舎建設に伴う発掘調査の際に、流路であった部分を２～５ｍほどの厚さで埋め立てていることが確認されている。本来は、白川に削られた崖面が連続していたのであろう。飯田丸は、浸食面と思われる地形の一部に当たると思われるが、郭はやや南へ突出した地形となっている。

河川の原流路推定　　熊本城築城以前の景観推定図

図 1-5　熊本城築城以前の景観推定図
富田紘一（2000）より転載。

第２項　歴史的環境

Ⅰ　周辺遺跡の概要

熊本城跡の土地利用の概略としては、古代から中世に国府所在地である二本木遺跡群と各所へ向かう官道などの交通の要所、中世の寺院、戦国期の城を経て、近世城郭の築城となり、近代の軍用地を経て現在に至る。城下町は、中世までの国府を核とした二本木遺跡群の町屋・寺院を、加藤清正が古町に移して隈本城時代の城下町と融合し、現在に至る。

以下に、熊本城跡遺跡群とその周辺にしぼって歴史的変遷を記述する。

熊本城跡遺跡群周辺域では、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡がみられる。京町台遺跡では縄文時代晩期の遺物、熊本城跡遺跡群の西縁部に当たる段山遺跡では打製石斧や磨製石斧が採集されている。また、近年の調査で、熊本城天守閣南の地蔵門の脇から縄文時代後期の土器片がまとまって出土している。弥生時代は、白川右岸の京町台地の先端から南南西に伸びる緩扇状地・自然堤防上に遺跡がみられる。船場町遺跡の中期の甕棺、古町遺跡の中期の甕棺（唐人町遺跡）や、後期の竪穴住居群が出土している。

古墳時代の熊本城跡遺跡群周辺については、前期・中期は不明瞭だが、後期には京町台地に特徴的な崖地形に多数の横穴墓が造られている。熊本城跡遺跡群内にも古城横穴群・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群がある。さらに北には、寺原横穴群や、津浦一の谷横穴群などがあり、熊本市域の横穴墓集中地の一つである。古城横穴群は、崖面に３段にわたって築かれ、数回の発掘調査で 53 基の横穴墓が確認されている。そのうち 39 号には「火守」あるいは「火安」と読める文字が刻まれた閉塞石があり、墓室からは鉄滓が出土している。被葬者の職制を反映したものと想定されている。千葉城横穴群は、昭和 37 年（1962）にＮＨＫ熊本放送局建設の際に発掘調査が行われ、10 基の横穴墓が出土した。横穴墓の配置は、「コ」字状に前庭部を囲むようで、前庭部を共有した横穴群であった可能性もある。これらの横穴群の集中に対して、墳丘を持つ古墳の分布は少ない。緩扇状地上にあった船場山古墳・長迫古墳・山崎古墳は、開発によって消滅し位置も不明瞭である。その中で山崎古墳は、長瀬真幸の調査記録により、寛政８年（1796）に主体部が発見されたことが知られる。発見の経緯と人骨や遺物の良好な出土状況は、長瀬の知友であった伴信友の『信友随筆』などに収録されて今日に伝えられている。

古代では、飽田郡の施設とみられる伝大道寺遺跡群がある。京町一帯は近世に武家屋敷・町人町として開発され、そのまま現代の市街地になっているため、近世以前の様相はわかりにくいが、本遺跡からは７世紀後半～９世紀の瓦が出土しており、有力な背景が想定できる。伝大道寺遺跡群付近には、養蚕駅から西へ延びた官道が想定されており、飽田郡の重要地点に造られた施設であった可能性もある。なお、熊本城跡内でも二の丸・三の丸・監物台で古瓦や土師器・腰帯具が出土している。

中世城としては、国衆といわれる在地土豪の居城とされる隈本城跡（千葉城跡・古城跡－いずれも熊本城跡遺跡群内）があげられる。古城跡の現第一高校セミナーハウスについては、発掘調査により散兵線とされる溝や版築土塁を検出している。中世の石造物資料は、熊本城内（熊本城跡遺跡群）や古町遺跡内の寺院に分布している。熊本城内のものとしては、地蔵門脇の大永２年（1522）銘「釈迦立像線刻板碑」、本丸御殿南に大永４年（1524）銘「如意輪観音像線刻板碑」、天文５年（1536）銘「阿弥陀三尊種子板碑」など、銘があるだけで 12 基確認されている。城内各所の石垣修理工事で出土した五輪塔等の部材も、型式的には 15・16 世紀のものが主体で先の記年銘がある石造物の時期と矛盾しない。熊本城築城以前の茶臼山には中世寺院（茶臼山廃寺）が存在したと想定されている。築城時に既存寺院の石造物を利用したものと想定できよう。古町遺跡の寺院内には、善教寺境内の建長２年（1250）銘宝塔塔身が最古例としてあり、15 世紀末から 16 世紀前半の板碑が多くみられる。

Ⅱ　熊本城と城下町の変遷

熊本城や城下町について、発掘調査等で考古学的所見が得られた点について、時代を追いながら記述する。文献資料からの所見は次節で詳述する。

熊本城が文献に登場するのは、南北朝時代である。肥前国松浦の大嶋堅と大嶋政の永和３年（1377）の軍忠状にみえる「隈本城」が初出で、位置の特定はされていない。

熊本城跡遺跡群内での端緒は、応仁年間に出田秀信が茶臼山の東側に迫り出した千葉城と呼ばれる一帯に城を築いたことに始まるとされる。地名としての千葉城は熊本城跡遺跡群の東端台地にあるが、地形等の改変が大きく詳細は不明である。先述のＮＨＫ熊本放送局建設の際の発掘調査でも城跡としての確証は得られていない。その後、『肥後国誌』によれば、明応５年（1496）に鹿子木親員（寂心）が築き、城親冬が天文 19 年（1550）に入城したという隈本城の城域は、第一高校から国立病院敷地内一帯と想定されている。現在でも古城という地名が残り、第一高校周辺には城内最古の石垣が良好な状態で残存している。発掘調査としては、第一高校セミナーハウス建築に伴う調査で 15 世紀半ばから 16 世紀後半の陶磁器が出土し、国立病院の看護学校建設に伴う調査で 16 世紀前葉からの掘立柱建物群が出土している。この掘立柱建物群は堀・柵・櫓で構成された防御施設で、鹿子木氏・城氏の在城時期と合致することから、当時の城域を考える上で重要な調査成果となった。

隈本城には、天正 15 年（1582）に佐々成政が、翌天正 16 年には加藤清正が入城し、清正は中世の城を織豊城郭に改修を進めている。その後、加藤清正は隈本城を拡大して、京町台地南端の茶臼山一帯に熊本城を築城した。出土資料としては、「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦が出土しており、少なくとも慶長４年（1599）から何らかの工事が行われていたと考えられる。本城整備に伴って、白川・坪井川の改修、城下町の再編成も行われた。先述のように、大きく蛇行していた白川の流路を直線的に付け替え、それまでの白川流路と隈本城惣堀を利用して坪井川を開削したと考えられている。これにより、熊本城南側の防御線は、坪井川が内堀、白川が外堀に相当することで強化され、同時に城下の洪水解消、武家屋敷の面積拡大、船運路の整備につながった。

旧白川の流路にあたると想定される桜馬場での発掘調査でも、17 世紀初頭に埋めたてられた流路が確認されている。同じ旧流路の下流にあたると想定される第一高校の校長官舎建築に伴う発掘調査でも、厚さ５メートルにわたる版築層が検出され、その下位に河道を示す砂地が確認されている。いずれも旧白川の埋め立てを証明する調査成果である。国立病院の看護学校建設に伴う調査では、加藤期と想定される道路が出土しており、築城に際した資材運搬用の修羅道の可能性が指摘されている。

加藤治世期の末、寛永６～８年（1629 ～ 1631）頃の作と推定される「熊本屋鋪割下絵図」（図 1-6、熊本県立図書館蔵）は、拡大・再編された城下町の様子を知る最古の資料である。この絵図にみえる城下町の範囲は、東から南は白川、北は出京町、西は段山から新町の高麗門・古町西側の坪井川・井芹川・石塘までである。北側の京町は、京町台地の東側・西側が急崖で囲まれており、北端に空堀と土塁を設けていた。

現在の新町は、隈本城時代の侍町として始まり、その後惣構として整備された。惣構は、西側には新町西側の水堀と堀の東側に土塁を設け、南側は新たに掘削した坪井川で区切った。惣構と城内を区切るのは新一丁目御門で、現在の法華坂の清爽園付近にあった。枡形を伴う櫓門であったが、枡形を含めて現存しない。門の前は広場となり、高札が掲げられ札ノ辻と呼ばれ、各方面に伸びる街道の基点となったとされる。惣構の西側は城の裏鬼門にあたるため寺町を整備し、惣構との連絡に「こうらい（高麗）門」が設けられた。

惣構の南側の古町には、古府中から移転した町屋が整備された。古町遺跡の発掘調査資料は、このことを反映しており、16 世紀末～ 17 世紀初頭から増加する。惣構内の新町が短冊形の町割で、「Ｔ」「Ｌ」字状の道が多いのに対して、古町は方一町の碁盤目状の区画の中央に寺院を配置するという特異な町割が

形成された。町割形成当初の武家地と町屋の違いと考えられ、その間は坪井川で明確に区切られている。惣構と町屋の連絡には、惣構側に新三丁目門と坪井川に現明八橋が設けられた。新三丁目門は、絵図では枡形を伴う櫓門であることが分かっていたが、近年発見された長崎大学図書館所蔵の古写真で、城内の櫓門に匹敵する規模の櫓門であったことが分かった。古町の一角の阿弥陀寺周辺に土塁の残存がみられ、惣構のように戦略上の配慮や水害対策が施されていた可能性もある。

明治維新の後、明治４年（1871）に、城内に鎮西鎮台が設置され、その後熊本城は第二次世界大戦終了まで陸軍の管理下に置かれた。明治初期には、各地の城郭と同じように熊本城でも櫓・塀・石垣の解体や改修が行われ、明治 10 年（1877）には西南戦争の主戦場の一つとなり、天守をはじめとする本丸中心部の大半の櫓が焼失した。本丸御殿の発掘調査では、焼失した御殿の建築材、金具などが焼損した状態で焼土とともに多量に出土している。西南戦争では城下町も戦場となり、「射界の清掃」戦略で意図的に火が放たれ、大半が焼失した。その痕跡は、新馬借遺跡や古町遺跡での発掘調査で確認されている。

西南戦争の後、軍施設はさらに整備され、明治 21 年（1888）には第六師団となる。軍の組織が整備されるに伴い、城内各所に新たな施設が建てられ、現在の天守前広場には大正６年（1917）に師団司令部が置かれた。桜馬場地区は、西南戦争以前から砲兵隊が置かれ、その後兵器工廠となった場所で、平成 20・21 年（2008・2009）に行われた同地区の確認調査で、大正年間に造られた工廠のレンガ造り建物の基礎が確認されている。西南戦争で焼失した城下町にも、戦後、山崎練兵所など軍関係の施設が整備されていく。

図 1-6 「熊本屋鋪割下絵図」（熊本県立図書館蔵）
寛永６～８年。

第３項　文献資料にみる熊本城

Ⅰ　南北朝～戦国時代の隈本城

貞治６年（1367）、足利義満が室町幕府三代将軍に就任すると、応安３年（1370）に幕府管領である細川頼之の推挙を受けて、今川貞世（了俊）を九州探題に任じた。応安４年、貞世は九州へと向かい、翌５年８月には大宰府の征西府攻略を果たす。この後、今川軍は肥後への侵攻を開始する。隈本城の存在を確認できる最も古い史料は、南北朝時代後期となる永和３年（1377）９月の「大島堅軍忠状」・「大島政軍忠状」[1] とされる。大嶋堅と政の軍忠状は、この２名が肥後侵攻と「隈本城」攻撃にあたって忠節を尽くしたことを記し、貞世の息子である今川義範が証判を加えたものである。また、同年９月 30 日付の「宗金書状写」[2] でも、今川氏が「肥後隈本城」に侵攻してきたが、数百人の負傷者を出しながらも防いだと記されている。隈本城は南朝側の城であった。しかし、この隈本城の具体的な場所については明らかでない。

従来、南北朝期の隈本城の場所については、藤崎台説と詫磨氏居城である本山城説があるが[3]、永和４年（1378）の「安芸大朝荘一分地頭虎熊丸代市原経顕軍忠状」[4] に「隈元敵城」に対抗する城として「藤崎城」が存在していたことが記される。藤崎台に存在した城は藤崎城と呼ばれており、隈本城と同一のものとは考えられない。また、本山城＝隈本城であれば今川軍の攻撃対象になっていることから、北朝方の詫磨氏の居城とするのは成り立たず、「隈本城」は藤崎城ならびに本山城とは別に存在した城である[5]。

隈本城の位置について、17 世紀後半の肥後の儒学者である辛島道珠が記した「肥後古城主考」には、「菊池四代藤原経宗の甥ニ出田経信アリ、十四代ノ孫、出田秀信始メテ隈本ノ城に居住スト菊池家譜ニ見エタリ」とある。次に、熊本藩士である森本一瑞の手によって明和９年（1769）に成立した『肥後国誌』[6] には「出田筑前守秀信所領八十町ヲ領シ初メテ隈本在城云今千葉城ナリ」とある。隈本城が千葉城に存在したとする根拠は示されていないが、18 世紀後半には出田氏の居城が千葉城に存在したとする認識が定着していたとみえる[7]。

文明年間（1469 ～ 1489）とみられる「菊池重朝書状」[8] では、出田山城守が藤崎宮の遷宮祝儀を宮内荘給人に催促することを守護である菊池氏が認めている。また、文明４年（1472）の「藤崎宮宮番次第」[9] の裏書には「惣政所出田山城守御代番帳御うつし」と記されており、文明頃に出田山城守は藤崎宮の惣政所職、つまり行政実務担当者である所司・政所・本司といった人々を統括する立場にあったことが判明する。以上の２点の史料は、出田山城守が実質的に藤崎宮領の宮内荘をはじめとする茶臼山周辺の土地を治めていたことを示す。隈本城は出田氏の拠点として機能していたと考えられる。

この時期の隈本城の様子を示すのが文亀２年（1502）４月 23 日付の「菊池武運（能運）書状」[10] である。この頃、菊池能運は守護の座を追われ島原半島に亡命していたが、相良氏の協力を得ながら地位回復を狙って挙兵した。史料中には、能運と小山右京亮や立田伊賀守などの地域の武士団およそ 730 名が隈本城に在城し守りを固めていたが、11 日に中条対馬守が裏切り隈本城を出奔し、続いて小山・立田氏も居所に帰ってしまったことが記されている。出田刑部少輔父子３名と親類 20 余名、そして能運の側近の者たちは城に残ったが、「城内拵所々之役所」などの持ち場を守りきれなくなり、出田氏と共に島原に退却することになった。その後、能運は守護職回復に成功したとみえるが、永正元年（1504）３月に死去したことにより、再び守護職の後継をめぐって阿蘇氏や大友氏らが介入し、混乱が起きた。

その後、守護として隈本城に入城したのは、大友義長の息子である菊池義武とされる。大友氏の初代は鎌倉幕府に仕えた貴族である中原氏であり、同じ中原氏の系譜をひく鹿子木氏も政治的立場を高めるために大友氏の肥後支配に協力したと考えられる。鹿子木氏は鎌倉時代より飽田郡北部の地頭であった。その後、鹿子木親員（寂心）が、永正 17 年（1520）の義武の肥後入国以前には飽田・詫磨両郡を治める国人領主となっていたようである。永正 16 年（1519）の「鹿子木親員書状」[11] では藤崎宮の社役につい

て百姓役を定めていることからも、社領だけでなく郡内の支配を行っていたと考えられる。

永正 17 年（1520）に肥後に入国し、隈本を拠点に肥後の支配を行った義武は、天文２年（1533）に大内氏と結び筑後国に出兵した。これにより、翌年大友氏は肥後に出兵し、義武は島原まで退去することとなった。この間、寂心は大友方に属していたため、天文 18 年に死去するまで隈本城に留まったと考えられる。その後、義武は相良氏の協力を仰ぎながら肥後奪還に臨むが、天文 12 年に義武の兄である大友義鑑が室町幕府より肥後国守護職を与えられる。しかし、天文 19 年に義鑑が家臣に殺害される事件が起きると、義武は鹿子木氏・田嶋氏を味方につけ、再び隈本城に入った。これに対し、義鑑のあとを継いだ義鎮は隈本城を攻め、義武は再び島原へ亡命した。これにより鹿子木・田嶋氏は没落し、隈本城には城親冬が入ることとなった。

城氏は菊池氏の一族で、赤星・隈府氏と並ぶ老者（家老）の地位にあった。親冬が隈本に入ったのはおそらく天文 19 年の義武と義鎮の合戦の論功行賞によるものであろう。鹿子木氏に替わって飽田・託磨の二郡を領することとなったと考えられる。親冬のあとを親賢が継ぐが、その年代は明らかでない。

天正６年（1578）、大友氏が日向耳川の戦いで島津氏に敗れると、大友氏の領国の国人たちは独自の動向を見せるようになった。城氏もその一人で、大友氏から自立する動きを示す。これに対し、大友方の御船城主甲斐宗運が出兵し、天正８年に旦過瀬の地で城・名和氏らと合戦した。城親賢は島津氏に救援を要請し、島津の軍勢が隈本城に入城している。

その後、天正９年 12 月に親賢が死去すると、嫡子である十郎太郎（久基）が跡を継いだが、若年のため出田親基を後見人とした。親基は親賢の弟であり、出田氏の養子となっている。このほかにも、城親冬の弟である政冬や、親賢の次男武房が出田家の養子となっているように、出田氏と城氏は深い関係にあった。

その後、島津氏は肥後侵攻を進め、天正 13 年には島津義弘が肥後国の守護代となる。さらに、大友方の甲斐宗運が死去すると阿蘇氏も降伏させ、島津氏は本格的な肥後支配と豊後侵攻を開始した。天正 15 年４月、島津攻めのため豊臣秀吉が隈本城に入城する。秀吉の右筆が記した「九州御動座記」[12] には、隈本城について「城十郎太郎と云者相踏候、数年相拵たる名城也」と賞賛している。さらに続けて、「五千計の大将、さしも嶋津一方之かためを為頼侍といへとも、就御動座無一支、居城に降参申、證人を出、御味方参候」とあり、城氏は島津氏にも信頼の置かれていた武将であったが、秀吉に対して抵抗することなく降参し味方になったと記されている。同年６月、肥後国は佐々成政に与えられ、成政は隈本城に入城した。しかし、成政による国人たちの知行の削減と検地の断行により、７月には国衆の一揆が発生する。

Ⅱ　加藤清正の入国と古城・新城

肥後国衆一揆を招いた佐々成政は、天正 16 年閏５月 14 日に切腹させられる。成政に代わって肥後北半国を加藤清正、南半国を小西行長が治めることとなった。清正は戦国期の領主たちが居城とした古城の隈本城に入ったと考えられ、その後隈本城の普請・作事を行なっていることが史料より判明する。居城の普請に関する具体的な指示を出している史料で最も古いものは、天正 19 年２月 26 日付の「加藤清正書状」[13] である。これによれば、清正は重臣たちに磊（らい）（石垣）・堀の普請を指示している。その後、天正から文禄年間にかけて居城の普請に関する具体的な指示がなされている。この時普請しているのは、現在の第一高校にあたる古城と推測されている。同年４月には、本丸に「おうへ」を建てるための材木の準備や、「てんしゆへ之はし」が架設されている。なお、天正 20 年９月 21 日の「加藤清正覚書案」には「其元さふらいまち、さうかまへのへいかけさせ、よろつ丈夫ニ可申付候」とあるように、武家屋敷や惣構の塀を含めた城下一帯の整備も進められている [14]。

一方、茶臼山での熊本城の築城時期は、通説では「続撰清正記」の記述から慶長６年（1601）の着工

とされているが、近年の研究ではその説に疑問が呈されている[15]。茶臼山に形成された熊本城に関して、残されている史料で最も古いものは、慶長５年 10 月 26 日付の加藤喜左衛門・下川又左衛門宛の清正書状とされる[16]。これによると、「如水其元被通候者、新城ニ而振舞候て可然候間、得其意、天守之作事差急、畳以下可取合候」とあり、島津討伐のために熊本を通過する黒田如水を「新城」で歓待するために天守の作事を急がせている。この時点で天守は畳を敷く段階まで作事が進んでいた。

このことから、熊本城の着工の時期は清正が朝鮮出兵から帰国した慶長３年末から翌４年頃と想定される。なお、熊本城内から「慶長四年八月吉日」銘の瓦が出土している。また、小山の瓦職人であった福田家の先祖附には、初代五右衛門が慶長３年の熊本城造営の際に瓦師棟梁職に任じられたと記される[17]。この時期には建物に葺く瓦を準備する段階にまで城の普請・作事が進んでいたとみることができる。

熊本城の完成時期については、乃美家蔵とされる文書に「隈本之文字之事、今度御城出来候ニ付御改候而、熊本と御書被成候」とあることから、慶長 12 年とされてきた[18]。なお、慶長 12 年４月 24 日付の並河金右衛門宛の清正書状[19]では「其地普請如何申付候哉、漸出来之時分ニ候」と述べられており、完成間近の状態であった。慶長 15 年の清正書状では本丸御殿の存在及び花畑屋敷の作事を指示しており[20]、この頃には天守や櫓などが完成し、居住空間である御殿の作事が行われていたとみられている。

Ⅲ　細川家入国後の熊本城

寛永９年（1632）、加藤忠広が改易となり、肥後国には細川忠利が入国する。忠利は 12 月９日に熊本城に入城しているが、この時の感想を「事外ひろき国にて候、城も江戸之外にはこれほとひろき見不申候」と、息子の光尚に伝えている[21]。

「肥後御入国宿割帳」[22]には、入国後から屋敷割が行われるまでの間、家臣たちは城下の寺や商人の家に宿泊したことが記されている。忠利が家臣らの屋敷割を行った際に使用されたと考えられる「熊本屋鋪割下絵図」（図 1-6）は、書かれている家臣の名前から、寛永６～８年の加藤忠広代の絵図と推定される[23]。異筆で細川家臣の名前が書き込まれており、加藤氏から引き継いだ絵図を細川家が屋敷割のために使用したものと考えられる。「熊本屋鋪割下絵図」の記載範囲は、北は出京町、南は白川と坪井川の合流地点、東は白川、西は井芹川となっている。加藤家末期の熊本城ならびに城下は、細川家時代の熊本城・城下のほぼ原型を示している。

細川家は入国後、加藤氏から引き継いだ熊本城の補修や改変を行っていることが、絵図や古文書より判明する。まず、寛永 10 年８月５日付の「肥後国隈本城廻普請仕度所目録」[24]によれば、水道・堀・土手の 11 箇所 988 間、石垣 25 箇所 1503 坪、塀４箇所 130 間、新櫓 27 つ（うち４つは櫓門）、新門 13 箇所を普請場所として挙げている。さらに、翌 11 年３月 17 日、忠利は江戸幕府の土井利勝・酒井忠勝宛に「肥後代」（加藤代）よりの塀・櫓の修復や、前年に破損した石垣の修築を願い出ている[25]。幕府に提出された絵図の控が「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」（図 1-7、熊本県立図書館蔵）であり、新しく普請を行う箇所を朱で示している。本丸部分の補修は比較的少なく、二の丸や三の丸の堀や石垣、門の増築が多く計画されている。絵図の端には石垣・櫓台等 27 箇所、土手切立５箇所、塀４箇所、櫓 28 箇所、門 12 箇所、堀の拡張４箇所、水通し１箇所の普請と堀の浚渫の許可を願う旨が記される。これに対し、４月 14 日には江戸幕府老中の連署による熊本城普請許可の奉書が出された[26]。この絵図と前年８月に作成された「肥後国隈本城廻普請仕度所目録」と比較すると、新たに堀の浚渫と花畑屋敷北の石垣１箇所、坪井川沿いの石垣２箇所が普請場所として追加されているほか、櫓が１箇所増加し、逆に門は１箇所減少しているのが分かる。

普請の進捗としては、寛永 13 年には江戸幕府老中酒井忠勝に対して「先年差上候絵図」に記載された普請箇所のうち、半分も着手していないと述べている[27]。その後、寛永 11 年に申請された普請に関する史料として、「御自分御普請」に収録されている寛永 21 年２月 12 日付の「熊本御城御普請所之目録」が

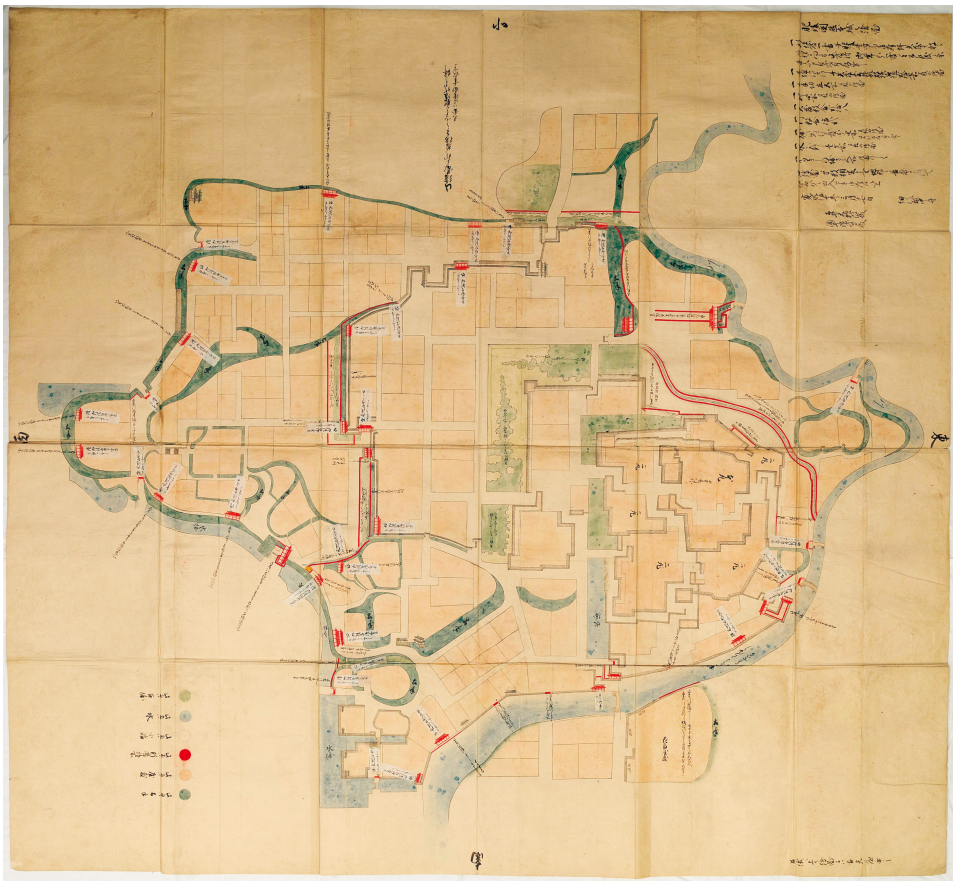


図 1-7 「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」（熊本県立図書館蔵）
寛永 11 年。

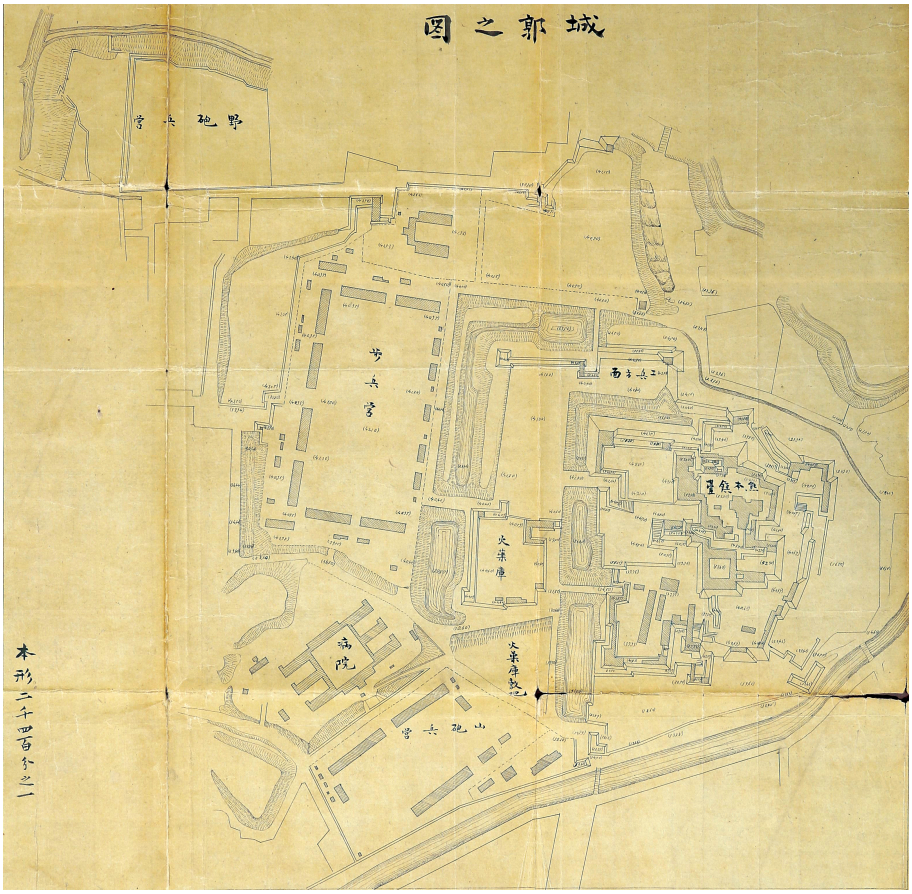


図 1-8 「熊本城郭及市街之図」（国立国会図書館蔵）城郭之図部分

ある[28]。本史料には、普請が完了していない場所を白付紙で示し、付札のない箇所については普請が完了した場所であると記される。史料中に、「此目録絵図之書付ニ引合、間数・所数相違無御座候」とあり、おそらく 11 年に作成した絵図で間数と普請場所とを照らし合わせて確認したと考えられる。

この文書によって寛永 21 年の段階で普請・作事の終了した場所を確認すると、土手は５箇所のうち３箇所、石垣は 27 箇所のうち 12 箇所、塀は４箇所のうち３箇所、水通しと堀はすべての箇所の普請が終了している。また、新しく建てる計画であった櫓は 28 箇所のうち８箇所、門は 12 箇所のうち３箇所が完成している。以上の普請申請箇所は、最終的に完了しなかったものが複数あることが、幕末までに作成された熊本城関係の絵図から見てとれる。

また、寛永 11 年に申請した普請箇所以外にも、同 17 年には白川から川尻までの井手の拡張や、本丸東の孕んだ石垣の修復を申請し、二代藩主の光尚の時期には洪水による城廻りの破損について、その修復許可を求め、許可されている[29]。これ以降、幕末にいたるまで普請願絵図なども複数残されており、細川期の熊本城の変遷を追うことが出来る。

Ⅳ　廃藩置県後の熊本城

明治４年（1871）、廃藩置県により熊本県庁は旧藩主の邸宅であった花畑邸に置かれた。同年８月 20 日、鎮西鎮台の設置が決定すると、本営を熊本県庁に置いた。これにより、県庁は二の丸の有吉邸へと移ることとなった。鎮西鎮台に花畑邸が引き渡されたのは明治５年４月３日のことである。明治６年、鎮西鎮台は熊本鎮台へと改称し、鎮台は熊本城に置かれた。この年３月に二の丸の操練場の兵営の建設が始まる。その後、明治７年６月に熊本城は陸軍用地に編入され、熊本城本丸に鎮台本営が移転する。さらに明治８年４月 15 日、歩兵第十三聯隊が編制され、二の丸に屯営した。同年４月には砲兵第六大隊が発足し、現在の熊本市民会館付近に仮営していたが、翌年には新兵舎が備前屋敷跡（現在の合同庁舎付近）に落成し、移転した。また、同年に編成された予備砲兵第三大隊も砲兵第六大隊の兵舎へ同居した。さらに、同年４月 17 日には工兵第六小隊が発足、花畑邸内に兵舎が置かれていたが失火のため全焼し、棒庵坂下仮兵舎へ移転している。

以上のように、廃藩置県から鎮台の設置によって熊本城内は様々な改変が行われた。明治６年９月には、「月見櫓取附塀已下何レモ大破、已ニ崩落ノ个所モ有之」という状況で、塀を解体している[30]。明治初年に撮影された古写真によると、飯田丸の百間御櫓や数寄屋丸の五階櫓、広間が撤去されている[31]。

明治 10 年に入ると、明治政府を下野していた西郷隆盛と、彼を支持する私学校党は、２月５日に挙兵した。明治 15 年に刊行された『熊本鎮台戦闘日記』[32] には、明治 10 年２月 14 日から 10 月６日までの西南戦争の戦闘の景況等がまとめられている。これによれば、２月 14 日より熊本城郭内外の籠城の準備に取り掛かっていることが記されている。竹之丸では炊事場を設置し、糧米 500 石と薪・炭などを貯蔵した。また、職人を雇い「地雷火」を製造させている。15 日には竹之丸と櫨方の両所に火薬庫を設け、敵弾による爆発を避けるため数箇所に分けて貯蔵した。16 日に棒庵坂上から空堀へ降りる道を開通させ、17 日には新堀門から法華坂にいたる道の一般人の通行を禁じ、翌 18 日、地雷や柵の設置、砲塁の築造を行った。また、元薩摩藩士であり、西南戦争では歩兵第十三聯隊第一大隊第三中隊長として熊本城に籠城した隈岡長道の戦闘日誌によれば、第三中隊の守備地では地雷を古城坂・鞍掛坂・法華坂の３箇所に埋設している[33]。

そして 19 日、熊本城の天守をはじめ、大多数の建物が炎上する。この火災の原因については官軍の自焼説、薩軍の放火説、失火説、市中の火事の類焼説など様々ある[34]。さらに、熊本の市中は、城下の民家などが薩軍の隠れ家や陣地となることを防ぐために、鎮台によって戦略的に焼き払われた。なお、家屋だけでなく、下馬橋をはじめとする主要な橋も薩軍の侵入を防ぐために官軍によって撤去された。

２月 21 日、薩軍が城下に侵入し熊本城での薩軍との戦闘が開始する。午後１時 20 分に熊本電信分局より伊藤博文参儀宛に「唯今戦争始め候、大砲しきりに放つ」との電報が打たれている。籠城の際、鎮台は守備隊を①千葉城付近守備隊、②下馬橋付近守備隊、③古城付近の守備隊、④藤崎台付近の守備隊、⑤京町方面の守備隊の五大地区に分割し、予備隊を西出丸北地区に分置、本営を宇土櫓に置いた。

鎮台兵の主要武器はスナイドル銃であり、熊本鎮台には他鎮台に先駆けて明治９年秋にスナイドル銃が支給されている[35)]。なお、スナイドル銃の弾薬の欠乏を防ぐため、夜間の探偵射撃にはエンフィールド銃を使用することとした。そのため、エンフィールド銃や弾薬は各堡塁に供給されていた。

熊本城に設置されていた電信分局は 21 日午後３時 40 分に断線したが、鎮台より４月８日に川尻方面に出発した突囲隊が征討軍と連絡を通じるのにようやく成功する。その後、川尻方面の官軍が 15 日に熊本城に入城し、２箇月に及ぶ籠城戦は終了した。

西南戦争後も、熊本城は陸軍によって管理され、改変を受けた。明治 12 年５月に編集された「熊本城郭及市街之図」（国立国会図書館蔵）の市街図部分には、天守台に倉庫、天守台の前にはコの字型の建物が描かれている。このコの字型の建物は明治 11 年に建築された熊本鎮台本営である[36)]。

明治 18 年５月には第十一旅団の本部が千葉城に置かれた。同 21 年５月には、熊本鎮台は第六師団となり、師団司令部が本丸に置かれた。歩兵第十一旅団は本部を千葉城から飯田丸へと移す。また、歩兵十三連隊が二ノ丸に、歩兵第二三連隊が花畑旧藩邸と監物台に分屯した。騎兵第六大隊は山崎町に、砲兵第六連隊は城内備前屋敷に、輜重第六大隊は古京町に置かれた。工兵第六大隊は千葉城に置かれたが、明治 22 年６月に大江渡鹿村の新兵営に移転している。明治 27 年には花畑旧藩邸の新築兵舎が完成し、歩兵第二三連隊はすべて花畑に移った。その後、師団のほとんどの兵営は大正 14 年（1925）頃までに城内から移転し、終戦後まで同じ位置にあったのは輜重第六大隊のみであった。

明治 22 年７月 28 日、熊本地方でマグニチュード 6.3 と推定される強い地震が発生した。震源地は金峰山東麓付近であったことから、金峰山地震と呼ばれる。この地震によって熊本城内も大きな被害を受けた。白川新聞の発行者である水島貫之は、「熊本明治震災日記」に被災状況を記している。師団営内の石垣の崩壊箇所は頬当門より数寄屋丸・闇御門入口及び闇御門内の左右の石垣、元飯田丸跡、軍法会議所北、同会議所内（元櫨方）及び衛戍兵営弾薬庫内、百間石垣、東竹の丸石垣など、29 箇所に及んだ。闇り通路、西出丸、飯田丸の石垣については、日本地震学会が調査のために撮影した古写真が残されており、被害状況を確認することができる。崩落した石垣は、軍によって復旧された。